ベラルーシ留学報告書

福島県立医科大学

医学部４年 永尾龍太(ながおりょうた)

Ryota Nagao

目次

1. はじめに
2. ベラルーシ留学の概要
3. ベラルーシ医科大学での実習
4. ゴメリ医科大学での実習
5. チェルノブイリ原発事故とその後
6. ベラルーシの医療システム
7. 留学中の学生との交流
8. 留学生活
9. 皆さんへのメッセージ
10. 謝辞
11. 参考文献

1. はじめに

今回、4/2～5/15 までベラルーシに短期留学しました。そもそも留学したいと思った理由は 3 つ。外国に、旅行という形ではなく留学という形で滞在し、現地の人達と交流したかったため。日本語が全く通じない環境に身を置き、自分がどのように生きていくか試してみたかったため。日本との違い(文化、人、生活、医療システム)を体感したかったため。以上です。

なお、ベラルーシ留学者はベラルーシに留学する前に向こうで学びたいテーマを決める必要があります。私のテーマはベラルーシの精神科医療について知るということでした。このテーマは後述のゴメリ医科大学での実習で言及します。

本学からはニューヨーク、中国の武漢、ベラルーシのミンスクとゴメリの 3 つのどれかに留学出来ます。では僕はなぜニューヨーク(アメリカ)でも武漢(中国)でもなくベラルーシを選んだか。日本とは全く文化が違い、心理的にこれらの中で日本から最も遠いためです。そのため、この機会を逃したらおそらく一生ベラルーシに行くことはなかったでしょう。

ベラルーシで体験した、感じたことを全て説明するにはこの報告書では足りませんが、この報告書を読んだ皆さんがベラルーシ、留学に興味を持ってくださることを願います。

2. ベラルーシ留学の概要

今回本学からベラルーシに派遣された学生は永尾龍太と石綿敬の2名。ベラルーシに滞在した期間は4/3〜5/15までの43日間です。羽田空港からオーストリアのウィーンを経由し首都のMinskに到着、帰国も同じルートでした。滞在都市は首都のMinskと地方都市のGomelです。Minskに4/3〜4/18、Gomelに4/19〜5/14、最後、Minskに5/15の1日(空港に移動するため)滞在しました。例年は5週間程度ですが、今年は10連休の影響で滞在期間が例年より1週間程度延びました。留学前は、1ヶ月半は長いなと感じていましたが、終わってみるとあっという間で、もうあと1ヶ月半はいたかったと思うほど濃厚で充実した生活でした。

Minskではベラルーシ医科大学が、Gomelではゴメリ州立医科大学が組んだプログラムにより、様々な授業や病院実習に参加しました。

3. ベラルーシ医科大学(BSMU)での実習

ベラルーシ医科大学では4/3〜4/18の16日間実習しました。実習先は軍事医学講座、腫瘍学病院、公衆衛生学講座、放射線医学講座、外科病院、救急病院、移植・血液学病院です。特に印象に残ったことを書きます。

1) 公衆衛生学講座

公衆衛生学講座では、ベラルーシの人口動態や臓器移植制度を聴いたり、学生とディスカッションをしました。また、Pavlovic先生からベラルーシの公衆衛生についてマンツーマンで聴きました。

ベラルーシの人口動態は、ここ10年ほど上がったり下がったりを繰り返して、900万から1000万人の間を上下しています。最近、子どもは1人で良いと考えているベラルーシの夫婦が増えているそうですが、これは経済的な理由ではなく、精神的な理由だそうです。

臓器提供について、ベラルーシでは生前に臓器提供拒否の意思を示さない限り、死後に健康な臓器が提供されるとのことです。臓器提供が少ない日本で必要な制度なのではと思いましたが、日本人は体にメスを入れることを強く拒む傾向があるため、日本での制度化は難しいと感じました。

学生とのディスカッションでは、医学部6年生達とお互いの大学生活について話しました。ベラルーシの大学には日本の部活のようなクラブ活動は一切ないと思っていましたが、そうでもなく、スポーツクラブやサイエンスクラブがあるそうで、サイエ

ンスクラブに所属する学生が多いとのことでした。自分としては新たな発見があったと思っています。

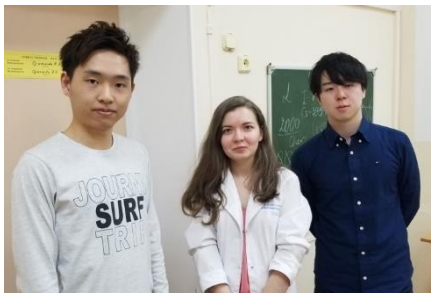
公衆衛生について、現状の国家予算内に占める医療費は5.2%程度ですが、それでは足りないとPavlovic先生はおっしゃっていました。計算上、国民1人あたり年間約260ドル分の医療費が支給されているとのことです。また、Pavlovic先生の通訳をしてくれた学生のPolinaに医師の給料を聞いたところ、医師1年目で月200ドル程度、3年目でも月400ドル程度と、物価が日本より比較的安いベラルーシでさえ食べるのにやっとの金額でした。そのためほとんどの学生は将来外国で働きたいと考えており、特にドイツが人気だとのことです。Polinaもドイツで働きたいと言っていました。

2) 放射線医学講座

放射線医学講座ではチェルノブイリ原発事故後の作業の様子のビデオやPalina先生のプレゼンテーションを聞きました。

事故について、1986年4月26日にチェルノブイリ原発事故は発生しました。

事故の原因は簡単に述べると3つ。反応炉の設計が危険だったため。反応炉の危険性に対する情報が欠如し、職員がいくつかのミスや不作為の規則違反をしたため。安全システムが事故発生のとき意味をなさなかったためです。事故発生後、風の影響でヨーロッパ中に放射性物質が飛散し、そのうち2/3程度がベラルーシ領土内に落ちてきました。放射線が特に吸収された作物はエンドウ(pea)でした。



Palina先生

3) 外科病院(Minsk clinical hospital No.6)

外科病院には朝7時10分に学生のMaxの車で出発し、8時からのカンファレンスに参加しました。全てロシア語でしたので全く分かりませんでしたが、なんとなく、将来医師になったらこういうものに日常的に参加するのだろうと考えていました。その後しばらく外科の医師が集まる部屋で少し談笑をしていましたが、その場にいた医師が皆たばこを吸っていたので大変驚きました。壁には日本語で「終日禁煙」の張り紙があったので笑ってしまいました。教授のBespalchuk先生は半年秋田に留学していたことがあり、そのときのお土産だとのことです。

ここでは手術の見学と共に、実際に手術着を着てアシスタントを務めました。そんなに難しい手術ではありませんでしたし、やったのはフックを使っての視野確保くらいです。ただ、非常に驚いたのが、手術室に窓があり、当たり前のように開けていたので外気が普通に入ってくることで、やろうと思えば外から手術室内が見えることでした。また、手術時に着るエプロン、シューカバーも使い回しでした。Bespalchuk 先生のアシストをしたとき、手術の最後の一針を縫わせていただきました。非常に貴重な経験でした。

左から教授の Bespalchuk 先生、中国人の帆(ファン)先生

4. ゴメリ医科大学での実習

ゴメリ医科大学のプログラムでは、地域病院の救急科の見学から始まり、小児病院、Korma 村の診療所、第 2 キャンパス(実習棟)、軍事医学講座、精神科病院、Republic scientific and practical center of radiation medicine and human ecology、自閉症の子ども達の施設、チェルノブイリ原発から 30km 圏内の制限区域と近くのホイニキ地区などに行きました。また、最終日にはミンスクと同じように、日本で用意してきたスライドを 30 人程度の学生達に発表しました。

1) 第 2 キャンパス

ここでは様々な医療手技の練習をしました。例えば声が出せるマネキンを使っての CPR や、乳児のマネキンを使っての気管挿管の練習(左の写真)です。この日、東アジア人っぽい学生がいたので話したら、カザフスタンから留学で来た医学部 6 年生(右の写真中央)でした。他の日には縫合の練習や腹腔鏡のシミュレーターでの練習をしました。

2） 軍事医学講座

軍事医学講座は学内にあり、主に災害医学と軍事医学カリキュラムを Michailovich 先生に 2 対 1 で学びました。軍事医学は現在では実質、災害医学でした。例えば、化学工場が被災して中の物質が外部に漏れたときに医療計画をたてるには、①何の物質が内部にあるか、②どれくらいの量あるのかを知り、風の方向、気温、近くの建物をコンピューターに打ち込むとプログラムで自動的に計画が出来るそうです。ちなみに、ベラルーシで近年起こる災害は主に春の洪水と森林火災とのことでした。来年リトアニアとの国境近くに原発が新しく出来るらしく、これで国の電力の 80% がまかなえるとおっしゃっていました。リトアニアはつい最近原発を廃炉したばかりなのに隣国のベラルーシに新原発が出来るということで反発が起きたようです。

軍事医学カリキュラムについてですが、軍事医学部はベラルーシ医科大学のみにあり、ゴメリにあるのは軍事医学コースであるとのことです。2 年生の 1 学期に週 2 時間、武器、地理学、軍規を学び、2 学期には軍組織を学びます。3 年生で災害、4 年生で毒物学を学び、4 年生の終わりには軍のキャンプに 1 ヶ月間参加し、実際に銃や手榴弾の投げ方などを実践します。5 年生で治療、6 年生で軍外科を学びます。これらに参加できるのは男性のみで、卒後 5 年軍医として働くそうです。軍事医学に普段なじみのない私にとってはとても興味がわきました。先生に教えていただいている途中、大きな声で何か唱和しているのが聞こえたので先生に質問したら、それは軍事医学の授業始めにやるルーティンだとおっしゃっていました。

マンツーマンでの授業が終わったら昼ご飯を食べ、午後はインド人留学生達と先生の授業に参加しました。学生達は間違いを恐れず積極的に発言していたのに対し、自分たちは完璧を求めてほとんど発言できませんでした。彼らの姿勢を参考にし、今後の自分の生活に取り入れていきたいと思いました。

軍事医学講座で教えてくださった Konstantin Michailovich 先生

3） 精神科病院

自分が最も興味のあるプログラムでした。もともと、3 年生時の精神科の授業で日本

の統合失調症患者の平均入院日数が諸外国に比べても非常に長く、地域で復帰を支援するより、病院での入院治療にプライオリティをおいていると聞き外国の違いを見たかったというのが興味の理由です。「2017 年患者調査の概況」によると、入院日数は 0～14 歳で 167.2 日、15～34 歳で 106.5 日、35～64 歳で 301.6 日、65 歳以上で 1210.6 日、全体の平均は 531.8 日と、長いのが特徴的です。ベラルーシではどうかと聞いたら全体の平均で 1～2 ヶ月とのことです。精神病患者へのサポートについて、Medical ministry が提供し、例えば IT 関連の仕事など、比較的他人との関わりを少なくして働ける機会を提供しています。精神病患者に手帳のようなものを配るのかという質問に対して、病気や障害の種類にかかわらず障害と診断された場合は制限とアドバンテージが課せられます。制限は例えば年間 150 日しか働けなくなることです。しかし、多くの場合そのような仕事はないので無職になってしまいます。アドバンテージでは、医療費の割引や公共交通機関の割引が受けられます。

以上の事は全て石綿君から聞いたことです。精神科病院でベラルーシの精神科医療の現場の雰囲気や問題点の質問が出来ることを期待していましたが、その唯一の機会を風邪で休まざるをえなかったことは、この留学における最も悔やまれることでした。

4) Korma 村の診療所

Korma 村には 6 年生達と一緒に行きました。ここはいわゆる過疎地域で、1700 人の住民に対し、診療所が 1 つ、医師が 1 人でした(ベラルーシでは住民 1300 人に医師 1 人が平均)。村の様子も、家と家の間が非常に広く、正に過疎地域という雰囲気がありました。この医師がいなくなったらどうなるのだろうと思いましたが、そのときはまた別の医師が派遣されるのだろうとも思いました。重症患者はここでは診ず、大きな病院に送るため、逆に言えばさまざまな病気を診る能力が必要なのだろうと思いました。いわゆる総合診療医の能力が必要だと思われます。

5) Republic scientific and practical center of radiation medicine and human ecology

ここではチェルノブイリ原発事故後の、チェルノブイリ被災者登録システムについて Ilya 先生にプレゼンテーションしていただきました。事故後の避難エリアは 5 つに分けられ、中心から順に Evacuation area(以下、避難区域)、The area of primary resettlement(以下、第 2 エリア)、The area of subsequent resettlement(以下、第 3 エリア)、The area with the right to

Ilya 先生

resettlement(以下、第4エリア)、The residential area with the periodic radiation control(以下、第5エリア) です。1993年にベラルーシ国内被災者登録システムが出来ました。ここに登録されている人たちは大きく7つのグループに分かれています。チェルノブイリ事故後の除去作業員、避難区域からの避難者、第2・第3エリアで働いていたまたは住んでいた人たちで避難した人、上記の3つのグループから新たに生まれた子ども、第4・第5エリアで働いていたまたは住んでいた人、チェルノブイリ原発事故以外に放射線施設や軍で放射線除染作業をした人、チェルノブイリで障害を受けた人の7つです。最も多いのは第4・第5エリアで働いていたまたは住んでいた人で、事故当時54万人、現在も44万人登録されています。事故で影響を受けた人の割合を見せていただきましたが、ゴメリが78% と、非常に大きく、改めて事故の影響を感じさせられました。

6) チェルノブイリから30km 圏内の立ち入り禁止区域とホイニキ地区

まず、チェルノブイリ原発から30km圏内の制限区域について書きます。前提として、チェルノブイリ原発に行くことは出来ません。原発はウクライナにあるためで、逆に言えばウクライナに行けばチェルノブイリツアーがあるらしく、入れるそうです。制限区域にはゴメリ滞在の最終日前日に入ったのですが、本来もっと早くに行く予定でした。これは私が風邪をひいてしまって延期したためです。Anastasiya先生が調整してくれて、許可をもらいました。まず、博物館で説明を受けました。1988年に1回目、1991年に2回目の制限区域設定がなされ、その区域内は人の活動はほぼ0です。制限区域内は人の活動が全くない(観察など、自然に手をつけない程度の行動以外)ため、野生の植物や動物が好き勝手に暮らしている状態です。ベラルーシ国内ではすでに見られない動物がここでは見られるということもあるそうです。また、廃墟も見学しました。日本から持ってきた空間線量計で放射線量を計測したところ、外では最高1.4μSV/h でした。これまで計測した中では最大値でした。

また、近くのホイニキ地区にある学校(6～18歳)では中学生達のプレゼンテーションを聴き、目の前で作物の放射線測定を行う様子を見せてもらいました。

制限区域内の廃墟

ホイニキ地区の学校

最終日には学生達に向けて、日本であらかじめ作ったプレゼンテーションを発表しました。私が発表したのは日本の医学教育についてです。終わった後、石綿君が学生達に対し、将来ベラルーシにとどまって働きたい人はいないか聞きましたが、手を挙げる学生は残念ながら一人もいませんでした。

最後の挨拶にロシア語の挨拶を入れたら学生にうけました。

プレゼンテーションの様子

5. 留学中の学生との交流

留学中、ミンスクでは Department of international relationships の５人の学生(Arthur、Max、Polina、Nico、Eugene)に実習先や観光に連れていってもらいました。

Arthur にはサーカスに、Max には国立美術館に、Eugene にはオペラ鑑賞に連れていってもらいました。Nico の親戚がグルジアワ

左から私、Arthur、Vlad、石綿君

小児医学部４年生の Max

インに詳しいとのことで、スーパーにあるワインでおすすめを教えてもらい、それを買って飲みました。ある日、Arthur が友達を紹介したいと言うので、友人で医学部 1 年の Vlad と会い、パーティー(下の写真左)をしました。彼はロシア人留学生で、将来ドイツで働きたいと言っていましたが、ロシアの大学を卒業してドイツで働くのは政治的に難しいとのことで、そのためベラルーシで勉強していると言っていました。また、アニメの NARUTO が好きでほとんど観ており、石綿君が今まで NARUTO を観たことがないためアニメ好きなロシア人がアニメをほとんど観ない日本人にアニメを見せるという面白い構図が出来ました。

また、ミンスクではミンスク国立言語大学で日本語を学んでいる学生達と交流しました。特に日本語が上手かったのは Yegor という男子学生で、9 月に大阪に留学することが決まっているらしいです。また、アニメ好きの男子学生 Yan とも仲良くなり、ベラルーシ滞在最終日に付き添いをしてくれました。彼の両親は国外で働いており、なぜかと聞いたら、ベラルーシの経済は駄目だから国外で稼ぐしかないと言っていたのが印象的でした。

ゴメリでは Sachkovscaya 先生が毎日様々な学生を私達と同伴させてくださり、学生

5/10 の戦勝記念日にカフェで

授業後に大学近くを散歩したときの写真

は皆、朝から夕方まで時間を共にしてくれました。

また、ある学生 2 人と面白い出会い方をしたのでここに記します。

ゴメリに到着して本学とゴメリ州立医科大学の調印式を終えたら、1 階で留学生達が自分の母国の料理を屋台として出したり、講堂で民族音楽のパフォーマンスや母国のプレゼンテーションをしていました。それを見たら、寮に行き、いろいろと調理器具などの使い方などを教えてもらい、Wi-Fi のパスワードも教えてもらいました。Wi-Fi は毎年無いと聞かされていたので、今年は運が良かったと思いましたが、他の部屋の Wi-Fi を使わせてもらっているため、石綿君の部屋ではつながるのですが、私の部屋では電波が弱く、時々途切れるくらい不安定でした。ただ、また別の部屋の Wi-Fi が自

分の部屋に安定して届くので、1階の寮母さんにそれのパスワードを知りませんかとロシア語でその旨の文を作って見せに行きました。

寮母さんは答えてくださったのですが、全てロシア語だったので、私も全く分からず困っていたところ、寮母さんがちょうど帰ってきた男子学生(医学部6年のIvan)をつかまえて、僕に教えてあげなさいと言ってくださいました。ただ、Ivanも英語をそんなに話せないので英語が出来る友達(医学部2年のJulia)を呼んできました。そこで彼女といろいろ話していたのですが、途中で、夜ご飯の予定はあるかきいてきたので、無いと言ったら、じゃあ私が作ってあげるという話になり、夜ご飯を作ってもらいました。そしてその夜に私とIvanとJuliaの3人で飲み会をし、様々な事を話しました。まさかWi-Fiのパスワードを聞くことから飲み会になるとは思いませんでした。到着当日いろいろと困っていたところに素晴らしい助けでした。

8. 留学生活

ミンスクとゴメリでの日々の生活について記します。

まずミンスクについてです。ミンスクでは大学のほぼ目の前にある寮に滞在しました。去年の留学生である及川さんや中島さんが泊まった寮は、ヨーロピアンゲームというスポーツ大会で選手のホテルとして利用されるため私達は使えませんでした。

平日は朝8時や9時頃に学生と寮の入り口で待ち合わせをし、大学内の学生食堂で一緒に朝ご飯を食べました。食事代は大学側から支払われているようで、私達は無料で食べていました。その後実習先に学生と地下鉄や車で向かい、午前中は授業を聴いたり、病院内を見学したり、学生と議論をしました。そうしてお昼過ぎくらいに実習先を出て大学に戻り、また学食で昼ご飯を食べました。その後Culture programということで様々な場所に観光しに行きました。第2次世界大戦博物館、オペラ鑑賞、医学歴史博物館などです。最終日に近づくにつれて、私達を連れていく場所が無くなったのか、昼ご飯後には解散ということもありました。夕食は自分たちで好きにしてくれという感じでした。部屋の近くに共用のキッチンや電子レンジはあったのですが、料理する気が起きなかったため、ほぼ毎日中心街に地下鉄で行ってレストランで食べていました。レストランによりますが、日本の半分から2/3程度の価格だったので日本と同じ価格でもっと良いものが食べられました。

学食

日本食レストランの寿司

休日は 11 時や 14 時に寮で待ち合わせをし、地下鉄で中心街へ向かってどこかレストランで昼ご飯を食べてから観光に向かう、または観光してから夜ご飯を食べるというスケジュールでした。サーカス、国立美術館などで鑑賞しました。その鑑賞代と昼ご飯代(または夜ご飯代)も大学に支払っていただきました。ある日、夜ご飯をレストランで食べていたのですが、豚肉の料理を 1 つ頼んだのに 2 つ来たことがありました。これが 2 つとも食べられる位の量だったらそのまま食べたでしょうが、人生で食べた最も大きな豚肉料理で、流石に返品しなければいけない大きさで、頼んだのは 1 つだから戻してくれと言ったのですが、店員さんは、いや、頼んだのは 2 つだと言い、どちらにせよ 2 つ分のお金を払わなければいけない状況でした。そのため、持ち帰りました。他のレストランでも同じようなことがあり、流石に抗議しようかと思いましたが、石綿君が食べると言ってくれたのでその場は収まりました。日本だったら店員さんが引き下がったでしょうが、ここは日本ではないと強く実感させられました。

次はゴメリについて書きます。ゴメリには 5/19 に電車で移動しました。ゴメリの寮には Wi-Fi はないと聞いていたのでインターネットは半ば諦めていたのですが、今年はありました。鍋やフライパンなどで調理する時はガスコンロでも IH ヒーターでもなく、小学校の実験で使ったような電熱線のコンロを使わなければいけなかったので、驚きと衝撃でした。電子レンジはなく、オーブンがありました。また、1 階にはトレーニングルームがあり、私はほぼ毎日寮に帰ってからそこに行って筋トレをしていまし

とある日の食事
(ボルシチ、パン、オムレツ)

た。ゴメリでは寮から大学までバスで 20 分以上かかり、近くにそれらしいレストランも無いため、毎朝、夕食は自分たちで作らなければいけませんでした。そのため、近くのスーパーで 2 日か 3 日に 1 回食材を買い、私が料理して石綿君が後片付けをするという生活でした。私は後片付けが本当に嫌だったのでお互いに助け合えました。ゴメリでも平日朝は学生が僕たちを迎えに来て実習先まで連れて行ってもらい、終わったらご飯を食べてどこかに観光に行き、スーパーに寄って寮に帰るという生活でした。スーパーでは、肉は日本のようにスライスされていたりブロックで売られているわけではなく、自分で何ｇくださいと言ってその分もらい、帰ってから自分で切って調理するという感じでした。私以外に肉を買っていた人たちはよく鶏肉を買っていました。日本はあらかじめ切ってパック詰めされているので、その便利さを改めて感じました。ベラルーシに来たので、せっかくだからベラルーシ料理を作れるようにしようと思ってドラニキ(ジャガイモのパンケーキ)やボルシチを作りました。写真を撮って公衆衛生学講座の Sharshakova 先生に見せたところ、これで福島にベラルーシ料理レストランが出来るわねと褒められました。ゴメリの学生達は非常にお世話をしてくれて私達に大きな不自由が無いように最大限の協力をしてくださいました。

9. 皆さんへのメッセージ

今回の 1 ヶ月半の留学では普通に日本にいるだけでは得られないであろう非常に多くの経験をさせていただきました。私自身、この留学中に考え方、価値観が色々変わったと自覚しています。この報告書を読んでいる全ての方と留学を考えている学生向けにお伝えしたいメッセージやアドバイスが色々とあります。まず、何事も Now or never ということを頭に置くと良いと思います。やりたいことがあったら今やらないと二度とそのチャンスは訪れないかも知れません。今回の留学で後悔しているのはもっと質問すれば良かった、お土産をもっと買っておけば良かったということです。向こうに行ってよくあったことが、例えばさっき言っていたのに質問されるのは気に障らないだろうかなどと考え、終わってしまったことです。日本人によくある、相手のことを考え、迷惑をかけそうなら我慢するという気質は、極端に言うとベラルーシでは何の役にもたちません。感謝や不満があるなら言葉に表すべきだと思います。誹謗中傷などの悪口を言わない限り、ほとんどの人は真摯に話を聴いてくれます。外国に滞在して右も左も分からない私達が迷惑をかけるのは当たり前です。もう 2 度と来ないかもしれないのだから、後悔をなるべく残さないようやりたいことはとことんやるべきだと思います。

また、自分で自分の限界を決めたり、自分を型に無理にはめようとしない方が良いと思います。例えば自分は日本人だからこういうことはしないとか、自分は福島の代表で来ているから下手な行動は出来ないとか、自分は英語が苦手だから留学は行けないなどです。

これは海外に行く人全員に向けてですが、グーグル翻訳を使ってでも何でも良いので、可能な限りコミュニケーションを取ろうとすることが大事です。決してロシア語は話せませんとは言わないこと。これはある日自分が、寮母さんが一生懸命話をしようとしているのにその言葉を言ったせいで、寮母さんにもうどうでもいいという感じで話を切り上げられてしまったことがあるためです。

留学する上ではその国の言葉を覚えた方が良いです。郷に入っては郷に従えという言葉があるように、現地で滞在するなら現地の言葉をいくらかでも言えるようにし、現地の人たちの生活習慣や考え方を真似するべきだと私は考えています。留学前にロシア語講座を解剖組織学講座の Elena 先生にしていただきましたが、自分はそれだけでなく向こうにロシア語の教本を持って行き、数や簡単な日常生活文は言えるようになりました。ゴメリでのプレゼンテーションの最後にロシア語で感謝の気持ちを文にし、学生にスピーチしたところとてもウケが良かったです。

また、アニメを観た方が学生とすぐ意気投合できます。ベラルーシの学生と話すときにほぼ必ずアニメを観ているかと聞かれました。それに対し、もちろん観ているよ、何が好き？と聞いたら半数以上が NARUTO を好きだと言っていました。私は NARUTO を 8 割くらい観ていたのでアニメの話が出来、それを機に仲良くなったということが多々ありました。ベラルーシでは NARUTO が最も人気なので、今後ベラルーシへの留学を考えている学生は、アニメ、特に NARUTO を観ることを強くおすすめします。アニメに限らず、今回の留学で意気投合できたのは、洋楽、ヨーロッパサッカー、楽器経験の話です。こちらもおすすめします。

10. 謝辞

まず、この留学報告書を通して自分がベラルーシでやってきたことや、自分の考えを発信する機会を与えてくださったことに感謝いたします。

今回のベラルーシ留学にあたって、多くの先生、学生にお世話になりました。まず日本では、災害医療総合センターの熊谷先生、放射線健康管理学講座の大津留先生、緑川先生、企画財務課の國分さん、教育研修支援課の谷口さん、解剖組織学講座の和栗先生、ロシア語を教えてくださった Elena 先生、長崎大学の高橋純平先生にお世話になりました。特に熊谷先生には日本にいるときから向こうの大学との連絡、交渉、生活のアドバイスなどで非常にお世話になりました。

ミンスクでは、我々留学生を受け入れる担当の Roudenok 先生、Department of international relationships の 5 人の学生達と 3 人の職員の方、実習先の先生方にお世話になりました。

ゴメリでは Sachikovscaya 先生、Sharshakova 先生、そして私達を様々なところへ連れていき、食事や休日まで共にしてくれた学生達、実習先の先生方に大変お世話になりました。皆様の協力無しではこの素晴らしい 1 ヶ月半の留学はあり得なかったでしょう。

この場を借りて心から最大限の感謝を申し上げます。

11. 参考文献

厚生労働省「平成 29 年患者調査の概況」3.退院患者の平均在院日数等
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/index.html

A I-3
4 AP-3